

アマテラスの実態

小柏 正弘

高天原の所在

日本神話で語られる神々のエピソードは、ストーリー性が似ていることからアジアの神話の影響を受けているとされる。

高天原の所在については諸説あるが、大和葛城金剛山説が比較的に無理がないようにみえる。同地には高天原の地名もあり、大和盆地の見下ろせる広い台地もあるという。

しかし天降りには船が用いられており、金剛山から大和盆地に降りるのには船はいらない。この点で無理があるのか。

天降りには船を潮流に乗せて東方へ下っていくイメージがつきまとう。先代旧事本紀によれば、饒速日が天降る際に天磐船に乗り、船長や舵取や船子が随伴し

ている。船が磐で出来ていては海に浮かぶはずもない。日本書紀には天磐椽樟船や鳥磐椽樟船が出てくる。となれば天磐船とは天の椽船であろう。

天の鳥船も国譲りの際に建御雷と共に葦原中国へ派遣されている。

日本書紀では「葦原中国」或いは「豊葦原中国」と表現され、古事記では「豊葦原の千秋長五百秋の水穂国」とされ、または「豊葦原水穂国」「葦原中国」と表現している。紀は記の矛盾しているところや、意味がとりにくい所を綺麗に修正して筋が通るように整理している形跡が見受けられることから、やはり記の方の成立時期が古いとみえる。

旧事本紀は記と同じように「豊葦原千五百秋水穂国」と表現しているところから、編纂に用いた原資料は古事記に近い物との推測がなりたつ。

饒速日は天火明と同神説が通説になつてゐるようだ。

天火明は記では邇邇芸命の兄に位置づけられてゐるが、その言動は記・紀では殆ど伝えていない。

意図的に抹殺されたかのである。天火明と呼ばれてゐた期間が短く伝承も少ないうちに饒速日となつたのだらうか。饒速日として記録してゐるから天火明の事績は記さなくても良いと判断されたものか。

他に高天原Ⅱ対馬説もある。またイザナギが禊をした日向の橘の小門は宮崎のように思われるが、だとするとやや遠すぎて出雲への航路はなかつたのではないか。宮崎には「高原町皇子原」の地名があり、神武天皇の誕生地との伝承もある。数々の著書のある梅原猛も、神話の里をめぐつた後に考えを変えたらしく、神話は事実だつたと述作した。

しかし宮崎には神話の史跡と伝承が完璧といえるくらいに、存在しているのが如何にも奇妙に思えるのである。1800年程も前の歴史が、これほど完全に揃つて残つてゐるものだらうか。色々な歴史を調べても、それほど長い間はつきりと史実が残つてゐるとは他で

は聞かないことである。

安本美典は高天原Ⅱ邪馬台国説で、天孫降臨は邪馬台国の一族が日向に南下したものと推定している。

イザナギが禊をした時に十二神が生まれたが、この中に海や水に関係のある神は七神を数える。

次いで生まれた十六神の内、海に関係ある神は七神となる。この後にアマテラスとスサノオが生まれてゐることから、この地が高天原となる。つまり古事記や先代旧事本紀は宮崎を高天原になぞらえてゐる。

「高」は美称で尊嚴の意を含むようだ。すると「天原」が地名となるのだらうが、「天」は抽象的なものであり「海^{あま}」を指しているようにみえる。「原」は台地をイメージしてつけられたものか。

高天原は、はるか遠くの彼方にあるとされ、天降りとは海を渡つて来ることであらうか。やはり本州へ沿岸航法で行ける北九州周辺が候補になるようだ。アマテラスとスサノオの子も宗像に鎮座してゐる。そうすると吉野ヶ里も候補の一つになり得る。類似の地名では吉野ヶ里に程近い鳥栖市に「原」の地名がある他、

福岡県に「山田」の地名が幾つか存在する。また朝倉郡には「安野」があり朝倉市の「甘木」「甘水」川崎町の「阿真木」などの地名もある。

或いは高天原は大陸に根源があるのだろうか。

出雲で国譲りを受けたのに、邇邇芸命が天降りしたのは筑紫だった。ここでは矛盾を生じてはいるが、紀の文脈から葦原中国とは主として出雲を指しているものの、九州をも含んだ領域が想定されている。

神話の構成

一般に「イザ」は誘うの意であるとされているがどうか。「ナギ」と「ナミ」には海を連想させるものがある。そしてイザナギは淡路島の海部集団に信仰されていた神という。

イザナギとイザナミは人類の始祖神として描かれ、大自然をも創成した神であるが、アダムとイヴになぞらえられたようなところもあり、島を次々に産むなど実在性は乏しいように思われる。

古代豪族の各氏族に伝わっていた墓記(家記・系譜)

とみられる、紀という一書にはどれも類似の神話が載せられている。アマテラスやスサノオの伝承は微かに伝えられていたが、そこから始めるには無理があり、自然の成り立ちを説明する必要に迫られ創作されたものではなかったか。

またイザナミにはスサノオと似たところがある。イザナギと結婚した後に離婚して対立する点もその一つである。イザナギに対し大軍をもって追いかけるところも類似点を求めることができる。

イザナミの死んだ場所は出雲の内と推測できる、黄泉比良坂に隣接する内側であった。葬られた所は出雲と伯伎の境の比婆山と記されている。紀では紀伊の熊野有馬村に葬られたとする。

こうしてみると元々のイザナミは出雲の神であったようだ。イザナミにはスサノオのキャラクターが投影されているとみることが出来る所以である。

対してイザナギは淡路に葬られており(紀)、記では近江の多賀としており大和系の神と思われる。ここに出雲と大和の祖先神を結び付けた形跡が窺える。そこに大和朝廷の優位性を保つためにイザナギ、イザナミ

の上に天之御中主を置いたと考えられる。

また始祖神である天之御中主神と国之常立神は、伊勢神道の神道五部書によると同神であるという。

アマテラスと豊宇氣毘売神の二神が、幽契を結んだ時の神名であるとされている。つまり豊宇氣毘売神がアマテラスと密会する時に、天之御中主神や国之常立神の名前を名乗っていたという事になるのか。

大野七三は「天照大神と豊宇氣毘売神が幽契をした御霊を尊崇して天之御中主神として奉った」と言っている。天照大神と豊宇氣毘売神の子を父親として架上にしたということなのだろうか。

ただ記では豊宇氣毘売神と表記していることからこの神は女神である。してみると御饌神にはふさわしいようだが、アマテラスと幽契を結んだのならアマテラスが男神となる。(伊勢)神宮にあるアマテラスの衣装は男のものであるという。

アマテラスの実態

アマテラスは始め大日靈尊と呼ばれていた。(紀・先代旧事本紀)アマテラスは古代に宮中に祭られていたことはなく、崇神天皇の御代に宮中から出された。

皇祖神とされたのは七世紀頃からとされる。

宮中八神殿に祭られていたのは、神産日、高御産日、玉積産日、生産日、足産日、大宮売、御食津、事代主である。事代主は本来は出雲の神ではなく大和において祀られていた神であるという。その故に此処に祀られているのであろう。

(伊勢)神宮に参拝した天皇は少なく持統帝が初めてであった。紀は高皇産靈を高天原の主祭神としており、「皇祖高皇産靈尊」と記している。

天之御中主の次に現れた高御産巢日は大和系の神であると考え、次に成り出た神産巢日は出雲系の神であろう。更にアマテラスと一時は結婚していた筈の須佐之男命の須佐は出雲の地名でもありスサノオは出雲の神であろう。

スサノオは新羅にも足跡を記しており、出雲と紀州にも伝承を残している。

紀（一書）には、スサノオは韓郷の島には金銀があると云ったと記されている。

スサノオが殺した大気都比売から蚕や稲種が生まれ、粟や小豆、麦や大豆も生まれていることから、スサノオは穀物の神と目されていたようだ。

スサノオの孫には、韓神や曾富理神などの渡来系の神と思われる神がいる他、聖神もまた渡来系という。これ等の三神はスサノオの孫とされているが、もしかしたらスサノオの祖先神ではなかったか。

新羅から渡って来たスサノオが、アマテラスの居る村を攻撃し一時は支配下に置いた。そして支配者（高御産巢日）の娘と思われる、アマテラスを妻に迎え行政を行っていたのであろう。

記・紀ではアマテラスの聖処女性を保ち、神格を上げるためにスサノオは弟としたが、兄弟間で子供が生まれる筈もなく設定に無理がある。記・紀ではアマテラスは何時の間にか、フェイドアウトしていつて何故かその最後は語られていない。陵墓や墓の所在にも触れていないのである。

アマテラスの両親イザナギとイザナミの陵墓は記録してあるが、一代降った子の死因はともかく墓が不明とは如何なものか。調査を尽くしても伝承や史料がなかったからではないか。

（記では「ごく簡単に「五十鈴の宮に齋き祭る」と記す）男狭穂塚、女狭穂塚説もあるが、こちらは三百年近くも時代が新しくなり受け入れられない。大野七三は年代的に見て神代は二世紀後半の頃としており、安本美典は、やはり年代論から神武天皇の時代を三世紀後半としている。

この時代は邪馬台国が存在していた時代であるが、神武天皇が邪馬台国の中にあつてどのような存在であったのかは論述していないようだ。また古事記や日本書紀が、邪馬台国について記述していないという大命題についても触れていない。

古来からその土地の支配権を篡奪する際には、支配者の娘を娶り血統を繋ぐ形をとるのが一般的なやり方だった。古くはスサノオが支配者とみられる足名稚の娘、櫛名田比売を娶っている、饒速日も大和の豪族ナ

ガスネヒコの娘を娶っている。そして継体天皇も同様の婚姻を結んでいる。

饒速日はアマテラスの孫で、邇邇芸命の兄とされているが実はスサノオの子で大年神であるという。(大野七三他) これを受けてスサノオの子として系図を見ていっても特段に破綻するような系譜は見当たらない。

すると出雲国が勢力を伸ばして大和へも進出したという事になる。傍証として記にはスサノオの子である八千矛神(大国主)が「出雲より倭国に登りまさむとして」の記述がある。他にも少名毘古那が出雲に現れた時に「吾をば倭の青垣の東の山上にいつき奉れ」と言っている。

いわゆる「国譲り」は出雲では大国主から武御雷に、大和では饒速日の息子、宇摩志麻治から神武へと2回行われたとみられる。この他に足名稚からスサノオが支配権を譲り受けたのも一種の国譲りであろう。

もつともイザナギは葦原中国の権力者だったらしく、記によれば黄泉の比良坂で「汝、吾を助けしが如く葦原中国にあらゆる美しき——中略——悩む時に助

けべく」と発言している。これを見ると葦原中国はイザナギからスサノオに継承されていたかのようにも窺える。

このように出雲と大和とは密接の関係があり、大和には今も「出雲」の地名が残っている。紀では葦原中国は出雲を指して描かれている。出雲は九州にも広く影響を及ぼしていたらしく、大己貴命を祭る神社が存在し、福岡には大己貴神社、美奈宜神社、宮崎には都農神社がある。関連性は不明ながら、長崎市には今も「出雲」の地名がある。

かくして出雲神話と大和神話が対になって語られ、これが縦糸の役割を担っている。出雲系の神話はスサノオや大国主などが、地名を含み具体的に語られるが、大和系は高天原の位置も曖昧でアマテラスのキャラクターをはじめ、言動などの記事は少なくリアルティーに欠けている。